

2026.09.06.

「ラザロの復活」

旧約 ヨブ記 19章 25～27節

新約 ヨハネによる福音書 11章 28～44節

1. はじめに

今朝与えられておりますみ言葉には、イエス様が愛しておられたマルタとマリアの姉妹の兄弟であるラザロが復活したという出来事が記されております。8月16日の礼拝において、27節までのところからみ言葉を受けました。イエス様はラザロが病気であるとの知らせを受けても、すぐにラザロのところには行かれず、二日間同じところに滞在されました。それは、知らせを受けてすぐに駆けつけても、ラザロは死んでしまっていることをご存知だったからです。イエス様がラザロのところに付くと、ラザロはすでに死んでおり、墓に葬られて4日後でした。イエス様は、ラザロを復活させるということをお決めになって、ラザロのところへ行かれました。しかし、その御心を知る者はおりませんでした。イエス様はヒントになるような言葉を弟子たちに告げているのですけれど、それが復活させることだとは弟子たちは思いませんでした。例えば 11 節でイエス様は弟子たちに「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」と告げられましたけれど、弟子たちは「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と答える始末です。イエス様はさらに「ラザロは死んだのだ。」と告げられましたけれど、弟子たちには何のことなのか分かりませんでした。イエス様はラザロが死んでしまったことを知っており、その死をうちぶり、復活させ、自らが神の御子・キリストであることを示すために、マルタとマリアのもとにやってきました。

イエス様が着くと、ラザロが既に墓に葬られて4日も経っていました。イエス様は既にそのことを分かったうえで来られたのですが、多くの弔問客がマルタもマリヤのところに来ていました。そして、マルタもマリアも愛する兄弟ラザロの打ちのめされておりました。当然のことですね。マルタもマリアもイエス様にお会いした時の第一声は同じでした。マルタは 21 節で「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」と告げ、マリアは 32 節で「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」全く同じ言葉です。ここには、「イエス様の御力への信頼と同時に、たとえイエス様でも死んだらおしまい、何もできない。」という二つの思いがはっきり示されています。マルタとマリアの思いは「イエス様がここにいてくれたら、兄弟ラザロはイエス様に癒していただけて、死ぬことはなかつたでしょう。でも、ラザロはもう死んでしまいました。手遅れです。」といったものではなかつたかと思います。

どんなにイエス様が力があっても、死には勝てない。死んだらおしまい。これこそ、この時マルタとマリヤそしてイエス様の弟子たちを覆っているもの、死に対しての無力感と言っても良いでしょう。しかし、イエス様がラザロの復活という出来事において示したかったことは、「死は真の支配者ではない」ということであり、「死は決定的な最後ではない」ということ「死では終わらない命がある」ということでした。

そして、イエス様はマルタに「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。 11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」と告げられました。復活というのは「終わりの日(つまり終末)に起こる将来のこと」ではなくて、既に、今ここでイエス様を信じる者はイエス様の命と結ばれ、復活の命に生きている。イエス様が共にいてくださるということは、この共おられるイエス様の命に私たちは結ばれており、私たちは既に「死んでも生きる」者とされているということです。聖餐のたびに私どもが受け取っている恵は、この恵みです。イエス様と既に一つにされている、イエス様の命が私の命と結びあわされているという恵です。ラザロを復活させることによって、マルタとマリヤ、イエス様の弟子たち、さらに復活したラザロの目撃者たちに、イエス様はそのことを教えられました。

2. 主イエスの憤り

イエス様はラザロの墓に行きます。途中でマリヤに会います。ここでイエス様は2回「心に憤りを覚え」ました。一回目は「彼女(マリヤ)が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て」心に憤りを覚えました。そして、もう一度はラザロの墓の前に来た時です。いったいイエス様は何に憤られたのでしょうか。イエス様が憤ったのは、二つあると思います。一つは、ラザロの死をどうにもくつがえすことが出来ないこととして、絶対の力をもっているかのように人々に臨んでいる「死」というものに対して、「死の力」に対してイエス様は憤られました。第二に、マルタとマリヤ、そして自分の弟子たちも含めて、みんながこの死の絶対的な力と支配を受け入れ、支配されているという現実に対して、イエス様は憤られた。37 節に「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」という言葉や、マルタやマリヤがイエス様に「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」と告げた言葉に表れている思い、イエス様でさえ死に対しては何もできないと人々が受け止めている。これに対してイエス様は憤られました。イエス様にしてみればこう言いたかったのではないのでしょうか。「死よ、お前の支配は終わった。死よ、天地を造られた父なる神様の命が、私を信じる者に与えられる。だから、死よ、お前はもう誰も逆らうことのできない絶対者などではない。神の独り子である私が来た以上、もうお前の時代は終わった。退け。」ということだったのではないのでしょうか。イエス様はこのラ

ザロの死に対して憤り、そしてラザロを復活させられたのです。

3. 主イエスの涙

ここでもう一つイエス様の心の動きを示す言葉が使われています。それが 35 節「涙を流された」です。イエス様はこの時、全能の力をもって死に対峙され、同時に、愛する者を失った人の悲しみを御自身のものとして引き受けてくださったのです。「憤りと涙」、この二つはまるで相容れない心の動きのように思われるかもしれませんが、そうではありません。イエス様が「全能の父なる神」が人となられたお方であるということは、この全能の力と愛がそこにはあるということです。ヘブライ人への手紙 4 章 15 節「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」とあるとおりです。愛する兄弟を死によって奪われたマルタとマリヤ、またラザロと親しくしていた人たち。彼らが泣いていたのは当然です。イエス様はこの人たちに同情され、その嘆きを自分の嘆きとして受け止められました。イエス様は、ラザロの死はこれで終わりというものではないのだから、「なぜ泣いているのか、泣く必要なんてない。」と言った具合に叱るようなお方ではありません。イエス様はマルタとマリアの悲しみ、嘆きを知っておられるお方だからです。私共の嘆きは、いつでもこのお方によって受け止められています。私共は独りで嘆き、悲しんでるのでありません。誰もわかってくれない嘆き・悲しみに捕らわれてしまった時でも、イエス様だけは分かってくださっています。いや、イエス様しか分かることなどできないのではないのでしょうか。この憐みを持ちつつ、イエス様はラザロの復活の出来事を起こされました。

4. ラザロの復活 ①死に勝利されるイエス様

イエス様はラザロの墓の石を取り除けなさいと命じられました。当時の墓は横穴です。横穴にラザロの遺体が入れられ、その入口が石で覆われていました。マルタは「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言いました。死んで 4 日もたっている。ドライアイスなんてありませんから、石を取り除けたらひどい腐敗臭がするに違いない。どうして今更墓の石を取り除けようとするのですか。マルタはイエス様の「石を取り除きなさい」というご命令が、何の為なのかさっぱり分からず、そう思ったのでしょう。しかし、イエス様はこう告げます。40 節「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」イエス様が告げられたこの言葉の意味を、マルタはよくわからなかったと思います。マルタはイエス様から「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。 11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」と言われましたけれど、このイエス様の言葉が何を意味してい

るのか、本当のところではよくわかっていなかったのでしょうか。でもイエス様が言われることですから、石を取り除きました。そうするとイエス様はこう祈ります。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。 11:42 わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」このイエス様の祈りはとても重要です。

第一に、ラザロの復活は父なる神様の御業としてなされた、ということを示しています。イエス様ご自身の力でラザロを復活させたわけではありません。全能の神様が、イエス様の祈りに答えられて、ラザロを復活させたわけです。これは大切な点です。イエス様はご自身でラザロを復活させたわけではない。それは、イエス様ご自身の復活もそうです。私共は「イエス様が復活した」とつい言ってしまいますけれど、聖書では「イエスは復活させられた」と全て受身形で記されています。翻訳の都合上「復活した」と訳しているところもギリシャ語では受身形になっています。このことについては後ほど触れます。

第二に、ラザロの復活は周りにいる群衆のため、またマルタ・マリアを含む弟子たちのために為されたということです。彼らが「信じる者」になるためです。イエス様を神様から遣わされた神の御子・キリストであると信じるため、イエス様は死の支配を打ち破る為に来られたということを信じるためです。これを信じる者が起こされることによって「神様の栄光」は現れます。信じない者が信じる者になるのは、神様が働いてくださらなければなりません。

第三に、イエス様の祈りはいつも父なる神様に聞かれるということです。この時のイエス様の祈りは「この祈りが聞かれたらいいな」というような祈りではありません。イエス様の祈りは「期待を込めて」というようなものではありません。イエス様は「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。」(41 節)と祈り始めます。もう祈りは聞かれた、必ず出来事が起きるという確信をもって祈られました。そして、実際ラザロは復活しました。イエス様と父なる神様は、それほどまでに一つであられるということです。私共が「この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります」と祈っておりますのは、イエス様が「わたしの名によって祈るように」命じられたからですけれど、それはこのようにイエス様の祈りは必ず神様に聞いていただけるからです。そのように私どもの祈りも父なる神様に聞いていただけると信じて、祈る為です。若い時、「得たりと信じて祈れ」と指導されたものです。

5. ラザロの復活 ②イエス様の復活への備え

このラザロの復活という出来事は、ヨハネによる福音書の中に記されている 7 つの「しるし」のなかでの、最後にして最大の奇跡です。ヨハネによる福音書では、この後の 12 章から受難週の記

述に入っていきます。つまり、この出来事の直後からイエス様は十字架へと歩まれ、そして三日目に復活される出来事へと続いていきます。他の福音書では、イエス様はご自身が十字架にかけられて後、復活するということを弟子たちに三回予告されました。そのことと合わせて考えるならば、このラザロの復活の出来事は、イエス様の三日目の復活を指し示しており、イエス様が十字架の死で全てが終わったかのように受け止めてはならないということを、弟子たちにお教えになったと受け止めることが出来るでしょう。イエス様の復活に向けての、弟子たちに対しての最後の訓練・準備です。もっとも、これほどまでに弟子たちのために備えておいてののですが、弟子たちはイエス様の十字架の死の後、「イエス様の復活を待つ」というようにはならなかった。それほどまでに、復活を信じるということは、人間には難しいことだということなのでしょう。それでも復活されたイエス様に会ったとき、弟子たちにはイエス様と歩んだ日々の様々な出来事やイエス様の言葉が、一つ一つ腑に落ちていって、全てのパズルが解けていくように福音が明らかにされていったことなのでしょう。

6.ラザロの復活 ③私たちの復活への確信

イエス様は「**ラザロ、出て来なさい**」と**大声で叫ばれました**。大声で叫ばれたのです。「**ラザロ出てきなさい**」です。ラザロの耳に、イエス様の声が聞こえました。死んだラザロにどうして聞こえたのか？理由はわかりません。でも聞こえたのです。そうして、4 日前に死んだラザロが**手と足を布で巻かれたまま出て来ました**。この出来事は、私に「自分が復活する時の場面」をイメージすることを助けてくれます。こういうイメージです。私共、それぞれの名前がイエス様の声で呼ばれます。イエス様の羊は、イエス様の声を聞き分けます(ヨハネ 10:16)ので、私共が自分の名前を呼ばれるイエス様の声を聞き洩らすことはありません。そして、この時私共は死から立ち上がり、復活します。そして、私共の名を呼んでくださったイエス様の御前に立つことになります。賛美と感謝が溢れてくることでしょう。私だけではありません、おびたしい数の代々にいます聖徒たちが共に復活します。きっと懐かしい顔を見つけることになるでしょう。私はその日をとても楽しみにしています。勿論、さっさと死んでしまいたいというわけではありません。生きている限りは、この地上における御用があるのですから、それをなしていかなければなりません。

ところで、先ほど「イエス様は自らの力によってラザロを復活させたのではない」と申しました。ラザロの復活もイエス様の復活も父なる神様の御業でした。ということは、イエス様は神の御子で、聖なる方だから復活できたのではないということになります。神様がそのようにするとお決めになったからイエス様は復活されたということです。だったら、私どもはどうでしょうか。同

じです。神様がそのようにお決めになったから、そうしていただけるのです。私どもが良い人だからでも、信仰深い人だからでもありません。ただ、イエス様を神の御子であると信じたからです。

7.ラザロの復活とイエス様の復活と私どもの復活

さて、ラザロの復活はイエス様の復活と同じではありません。ラザロは今でもエルサレムで生きている、ということではないからです。きっとイエス様のご復活の後で成立したキリストの教会において、「復活したラザロ」として、その存在をもって、生き証人として神様・イエス様の御力を証し続けたに違いありません。でも、何十年後かには死を迎えたことでしょう。復活したラザロの体と、復活されたイエス様の体も同じではありません。復活されたイエス様は天に昇られましたけれど、ラザロが天に上ったとはどこにも記されておりません。ラザロの復活は、イエス様の祈りには肉体の死さえも打ち破る力があることを示しましたし、肉体の死で全てが終わったと考えしまう人間には大変衝撃的なことでしたし、父なる神様の御力だどれほど大いなるものであるかが示されました。しかし、ラザロは復活してイエス様に似た者になったわけではありません。イエス様の復活は永遠の命の初穂として復活されました。ラザロが初穂ではありませんでした。

では、私どもの復活はどうなのでしょう。それは、イエス様の復活と重ね合わされる出来事です。私どもは単にこの肉体が復活するのではなくて、イエス様に似た者として復活するからです。体だけではなくて、心もキリストに似た者とされます。私どもはこの恵みに与る者とされています。それがイエス様によって救われたということです。肉体は日々衰えようとも、この命が衰えていくことはありません。何と幸いなことでしょう。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう全能の父なる神様。

あなた様は今朝、ラザロの復活の出来事を記したみ言葉から、私どもに約束されている復活の命、永遠の命へと思いを向けることが出来ました。ありがとうございます。私どもは、この地上の命が全てであるかのような思い違いをしてしまいます。私どもには、ただ信仰によって「死んでも生きる命」「復活の命」が与えられています。ありがとうございます。この恵みの中に生き切ることが出来るように、聖霊なる神様の導きを願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン